

パラリンピックに思う (メルマガ 2021年9月号)

9月5日、私たちに強いメッセージを遺してパラリンピックが閉幕しました。パラアスリートの活躍に大きな感動を覚えましたし、自己の障がいに向き合い、もっている能力や機能を最大限発揮している姿に、パラリンピックで重視される「勇気」、「強い意志」、「インスピレーション」、「公平」の4つの価値が体現されていることを感じました。そして改めて、障がいや障がい者に対する理解を深め新たな気づきを覚え、共生社会を実現する意義を考える機会となりました。

パラアスリートの鍛えられた身体や磨かれた技能を目にして、それに至るまでの努力は並大抵のものではないと思いました。生まれながらに障がいのある選手もいますし、不慮の事故で障がい者となった選手もいます。障がいに向き合ったときのショックは想像を絶するものですし、これを受け入れ乗り越えるには相当に不安や悩み、悔やみなどを抱えたことと思います。その乗り越える精神力、強い意志に大きな感銘を覚えます。

22競技、539種目の中からどれかを選び出せるものではありませんが、メルマガ読者の皆様にはどの場面が印象深いことでしょうか。女子背泳ぎの運動機能障害のクラスの山田美幸選手は生まれたときから両腕がなく、両足にも障がいがあるため、ふだんは電動車いすを使っている選手です。両腕で水をかいて進む選手とともに、山田選手は不自由な足の推進力だけで泳ぎ、2個の銀メダルを獲得しました。感動を与える素晴らしい泳ぎでした。

男子卓球の腕や足に障がいのあるクラスで、エジプトのイブラヒームエルフセイニ・ハマドトゥ選手は、ラケットを口にくわえてプレーしました。10歳の時に列車事故で両腕を失い、13歳から本格的に卓球を始めたそうですが、初めの頃は10分間で歯の痛みには耐えられず、歯の痛みとの戦いだったそうです。このトレーニングを重ねたことはものすごい精神力です。試合後に、『『できないことはない』と世界中の人に知ってほしい』とメッセージを伝えています。経験に裏付けられた重い言葉だと思いました。

パラアスリートの活躍は、私たちに障がいの有無に関わらず、諦めず挑戦することの勇気や尊さを教えてくれました。こうした意味で極めて価値のある大会であったと思います。

さて、世界人口の15%の人には何らかの障がいがあるそうです。パラアスリートの世界に止まることなく、このパラリンピックを契機として、「多様性を認め、誰もが個性や能力を発揮し活躍できる公正な機会が与えられる共生社会」を具現化することは重要な課題です。これからの社会をハード面でも心の面でも一層バリアフリーにしていくことが必要ですし、もとより微力ではありますがその実現に少しでも役立ちたいと思います。

現在、川崎市では「誰もが自分らしく暮らし、自己実現を目指せる地域づくり」を目指し、「人々の意識や社会環境のバリアと取り除き、誰もが社会参加できる環境を創り出す」ことを理念とした「かわさきパラムーブメント」が推進されており、素晴らしい取組であると言えます。一人一人にこの理念が理解されることにより、多様性が尊重され、違いが豊かさとなるまちづくりが更に進むことを期待したいと思います。(N.W)